

『マツタケ —不確定な時代を生きる術—』

アナ・チン 著（赤嶺 淳訳）

国際領域 主任研究官 須田 文明



『マツタケ
—不確定な時代を生きる術—』
著者／アナ・チン
出版年／2019年
発行所／みすず書房

本書の英語原版の出版年は2015年です。題名と副題を直訳すれば「世界の終わりでのキノコ：資本主義的廃墟における生命の可能性について」です。もちろん本書は、今、私たちが生きているパンデミック禍を予告していたわけではありません。しかし本書は、この1年半以上におよぶ（拙稿執筆時点では出口さえ見通せない）体験から何を学び取ったらいいいのか、そのヒントを評者に示してくれたように思います。中国系米国人の人類学者である著者は、マツタケを求めて米国オレゴン州から日本、カナダ、中国、フィンランドへと旅をします。本書はわくわくするような民族誌的記述と、かなり難解な反資本主義的フェミニズム論の記述が入り組んでいます。私の理解できる限りでの本書のさわりを紹介します。

「第1章」では、1989年のオレゴン州での天然林の伐採について、環境保護団体と伐採企業との間の対立が語られています。同年には、「白い黄金」（もちろん日本への輸出用）たるマツタケを求めて、森林を渉猟する人々の群れが見られましたが、こうした人々は、「白人労働者の雇用」と「環境」をめぐる対立からは抜け落ちていたようです。もっとも「21世紀になると『仕事か環境か』という発想自体が説得力を失った。もはや米国には20世紀的な意味での職などなくなっていた」とのことです。今じゃ日本だって同じだ、と評者は暗澹たる気持ちになりました。

マツタケ狩りたちの多くは悲惨な戦争体験を背負っています（「第5章」及び「第6章」）。白人の場合、ベトナム戦争の帰還兵でトラウマのために社会に適応できず、また東南アジアの難民も戦火を逃れて米国にやってきた人々、若しくはその子供たちです。彼らの多くは「労働」を拒否する人たちで、マツタケ狩りは労働とは見なされていないようです。マツタケ狩りやバイヤーたちが集うキャンプはまさに、彼らがとりつかれている自由、「フリーダム」を交換し合う劇場となっているようです。

「第7章」では、オレゴン州で最初に「マツタケ狂い」になった日本人たちについて語られます。1882年-1907年の間に日本人は米国に渡り、定着して農業を行い、シーズンごとにマツタケ狩りを行っ

ていたようです。やがて戦争とともに公民権を停止され、強制収容所に収容されます。日系米国人は強制収容所で同化を教えられまし

た。東南アジアの難民たちは新自由主義的多文化主義の時代に米国人になったのに対して、日系人の米国への同化は、ニューディールから20世紀前半までの福祉国家の政治文化の下で進みました。こうしたこともあり日系人は比較的安定した職業に就くことができたようです。日系米国人が最初に商売としてマツタケ狩りを始めましたが、1980年代後半には白人と東南アジア系のマツタケ狩りにとって代わりました。今では、日系人は売るためにではなく、友人と家族のために狩っているとのこと。

「第16章」は科学としての「マツタケ学」の国際比較がなされています。科学は普遍的であり、なぜ一国主義的な「マツタケ学」が存在するのか論じられます。この学問は国家の支援する林学研究機関と結び付いているので一国主義的だといふのです。例えば日本の里山では人為的攪乱が少なすぎるものがマツタケ山を脅威にさらしたのに対し、米国では過度の人為的攪乱が種を絶滅に追いやったそうです。中国雲南省には米国の森林保全専門家がやってきており、米国流のマツタケ学が影響力を持っています。今の中国では、若く野心的な研究者は日本語の文献を読むことはなく、日本語文献に依拠すれば、英語の読めない時代遅れの年輩の科学者との評価を下されるのだそうです。

著者は最後の「第4部」の導入部で、「潜在的コモンズ」について書いています。それは人間だけのものではなく、生態系を形成する絡まりあいだそうです。またそれは制度化できないそうです。評者はコモンズをうまく制度に乗せることで社会経済理論の刷新を考えていたのですが、自らの思い上がりを見事にたしなめられました。本書の著者は、それよりも複数種の暮らしからなる潜在的コモンズに「気づく術」を勧めます。ここでは難解な理論的部分は紹介できませんでしたが是非一読してください。